

龍逢板出 張華台圻

【題意】

識緯しんいに関する話。夏の閼龍逢かんりゅうほうが殺された後、桀王けつわうの運命を記した金板きんばんが、その庭から出た。下句かく、張華ちやうかが三公になった時、中台星ちゆうたいせいの光が圻きけたか。果たして害にあった。

【原文】

舊注、引論語陰嬖ひ識し曰、庚子之旦、金板尅く書、出地庭中一。

曰、臣族虐王禽。宋均曰、謂下殺閼龍逢之後、庚子之旦、庭中地有中此板異上一也。

龍同姓、稱族虐王一。王殺我、必見禽也。

晉書、張華字茂先、范陽方城人。

學業優博、辭藻溫麗、器識弘曠。初未知名。著鷦鷯賦一。阮籍見之曰、王佐才也。

由是聲名始著。晉受禪、拜黃門侍郎一。

華強記默識、四海之内、若指諸掌一。武帝嘗問漢宮室制度一。

應封如流、聽者忘倦。數歲拜中書令一。

贊成伐吳之計、封廣武縣侯一。

名重一世、衆所推服、聲譽益甚、有台輔之望、惠帝時、拜中書監、盡忠匡輔、

彌縫補闕。雖當閼主虐后之朝、而海内晏然華之功也。

進司空、第舍及監省、數有妖怪一。少子躋以中台星圻、勸華遜位。

華不從曰、天道玄遠。惟修德以應耳。不如靜以待之、以俟天命、卒之以忠正一。

爲趙王倫・孫秀等、矯詔害之。朝野悲痛。華性好人物、士有二介之善、爲之延譽。

雅愛書籍。嘗徙居、載書三十乘。

天下奇祕、世所稀有者、悉在華處。博物洽聞、世無與比。

【訓み下し文】

舊注に、論語陰嬖讒を引いて曰く、庚子の旦、金板に書を尅せるもの、地庭中より出づ。

曰く、臣が族虐王禽にせられん、と。

宋均曰く、關龍逢を殺すの後、庚子の旦、庭中の地に此の板異有るを謂ふなり。

龍は同姓なれば、族虐王と稱す。王我を殺したれば、必ず禽にせられんとなり、と。

晉書にいふ、張華字は茂先、范湯方城の人なり。學業優博、辭藻溫麗、器識弘曠なり。

初め未だ名を知られず。鷦鷯の賦を著す。阮籍之を見て曰く、王佐の才なり、と。

是に由りて聲名始めて著る。晉禪りを受けて、黃門侍郎に拜す。

華強記默識、四海の内、諸を掌に指すが若し。武帝嘗て漢の宮室制度を問ふ。

應對流るるが如く、聽く者倦むを忘る。數歳にして中書令に拜す。

呉を伐つの計に賛成し、廣武縣侯に封ぜらる。

名一世に重く、衆に推服せられ、聲譽益々甚だしく、台輔の望み有り。

惠帝の時、中書監に拜せられ、忠を盡くして匡輔し、彌縫して闕を補ふ。

閹主虐后の朝に當たると雖も、而も、海内晏然たるは華の功なり。

司空に進み、第舍及び監省、數々妖怪有り。少子驪、中台の星の坼くるを以て、華に位を遜ら

んことを勸む。

華從はずして曰く、天道玄遠なり。惟德を修め、以て應ぜんのみ。

如かず、靜にして以て之を待ち、以て天命を候ち、之を卒ふるに忠正を以てせんには、と。

趙王倫・孫秀等の爲に、詔を矯めて害せらる。朝野悲痛す。

華、性人物を好み、士に一介の善有れば、之が爲に延譽す。

雅より書籍を愛す。嘗て居を徙すや、書を載すること三十乘なり。

天下の奇祕、世に稀に有る所の者、悉く華の處に在り。博物浩聞にして、世與に比ひ無し。

【通釈】（現代口語訳）

旧注に、『論語陰嬉識』という書物を引いて次のようにいつておる。庚子かのえねの日の朝、黄金の札に字を刻んだものが庭の地中から出て来た。その文句に、「臣の一族である虐王じやくわうが擒とらりにされるだろう」とあった。宋均そうきんがこれに注釈して、「これは夏の関龍逢かんりゅうほうが桀王けつわうに殺された後、庚子かのえねの日の朝、その庭の地中から、こういう奇異な黄金の札の出たことをいつたものである。龍逢は夏と同姓で、姒姓しせいであったから、一族の虐王と称したのである。札の意味は、王が罪のない自分を殺したから、その報いとして夏の国は滅亡し、桀王いんは殷とうの湯王とうわうにとりこにせられようと予言したのである」と。

『晋書』にいうよう、張華は字を茂先もせんといい、范陽郡方城县はんようぐんほうじょうけんの人である。学業はすぐれて広く、詩文はおだやかでしかも美しく、器量識見が広大だった。しかし、初めはまだ世間に名を知られていなかった。鵽みぞさぎの賦ふを作った。阮籍げんせきがこれを見て、「この作者はこの賦で察するのに王補佐の才能がある」といつてほめた。この事からその名声がはじめて世に知れた。晋が魏から帝位を譲り受けた時、彼は黄門侍郎こうもんじろう（侍従職）に任ぜられた。彼は記憶力強く、口にはいわないが事物をすべて心に会得くわいてしており、天下のことは掌ちやうを指すように容易にわきまえていた。たとえば、武帝が漢の宮室きうしつの制度を問うたことがあるが、その応対は流れるようであつてどこおらず、聞く者を退屈させなかったという具合である。僅か数年で中書令なかしよれい（中書省長官）に任命された。呉を討伐するに当たっては、その計略を助けて手柄があつたため、広武県侯こうぶけんこうに封ぜられ、その名は一世に重んぜられ、大勢の者から推重敬服すいちようけいふくされ、ほまれはいよいよ高く、三公の位に推される程の声望があつた。恵帝の時、中書監ちゆうしよかん（中書令にほぼ同じ）に拝せられ、忠を尽くし帝をただし助け、政治の欠陥をとりつくり補った。それ故、暗愚あんぐな天子恵帝、淫虐かな賈皇后みよの御代だったが、天下が安らかに治まったのは全く彼の功績あればこそだった。

司空（丞相の副）に榮進した。すると、彼の屋敷や勤め先の中書監の役所にしばしば妖怪が現

われた。末の子躰は天文に明らかだったので、三公を象徴する三台星の中座星たる中台星の光芒が裂けたのを観察して、不吉であるとし、父に勧めて司空の位を去るように進言した。しかし、彼は息子の忠告に従わないでいった。「天の道は奥深く遠く、測り知れないものがある。自分としてはただ徳を修めて天に応ずるのみである。それには、心静かに徳を修めて天に応ずるのを待ち、しかる後与えられた天寿をまち、一生を終えるまで、正しく誠ある心を持って朝廷に尽くす以外にはない。」ところが星占いが当たったか、趙王の倫や孫秀らのために、詔をいつわられて害された。朝野は彼の死を悲しみいたんだ。

彼はその性人物を好み愛し、士人で僅かでも善い点があれば、世に引き出しほめあらわした。平素書物を愛好し、蔵書多く、ある時の引つ越しには、書物を積んだ車の数が三十台もあった。その書物は天下中の奇書や秘密の書、あるいは世に稀にきりない物で、それが悉く彼の所に蔵されていた。又、彼は博識で、あまねく物事を聞き知っており、当時の世に比較する者がいなかった。

【語註】（語彙説明）

○論語陰騭識……緯書（未来を予言する書）。『文選』卷四十、任彦升の百辟勸進今上牋の本文に、「金版出地、告龍逢之怨」の語がある。この注にこの書が引かれているが、これが蒙求の出典である。徐注本はその出処が不明だったので、「旧注引云々」と記した。

○金板……『文選』には金版に作る。版は札。

○虐王……暴虐の王桀をさす。夏の王朝の最後の天子で、殷の紂王と共に残虐な王として知られる。

○閔龍逢……夏の賢臣。桀王の長夜の飲を諫めて殺された。

○晋書……列伝六。

○鷦鷯賦・・・『文選』卷十三所収。鷦鷯はみそさざい。『莊子』の「鷦鷯林に巢くふも一枝に返ぎず云々」に本づき、声も毛も美ならず、小形で無用のため反って安全。無智のようだが結構智に似た処世術を心得ておる鳥だという趣旨のもの。

○台輔・・・「台」は三台星。三公に比する。

○闇主虐后・・・暗主の恵帝は晋恵聞蟻（三二八）の主人公。虐后の賈后は南風擲孕（三九五）の主人公。

○趙王倫・・・趙倫瘤怪（四七九）の主人公。

○孫秀・・・緑珠墜楼（二七九）に、他人の愛姫緑珠を奪おうとしたことが見える。

○一介・・・「介」は芥に同じ。芥のような微細のもの。

【出典】『新釈漢文大系』第59巻 「蒙求（下）」